

『送友人』 李白

送友人 李白
友人を送る 李白

青山横北郭
白水绕东城
此地一为别
孤蓬万里征
浮云游子意
落日故人情
挥手自兹去
萧萧班马鸣

青山北郭に横たわり
白水東城を遶る
此地一たび別れを爲し
孤蓬萬里に征く
浮雲遊子の意
落日故人の情
手を揮つて茲より去れば
蕭蕭として斑馬鳴く

ただひとり遠い旅に出かける友人とのつきない惜別の情

【意解】

青青とした山は、町の北側に横たわっており、白く輝く川の水は、町の東側を廻っている。

(いま)この地で、いったん別れてしまうと、(君は)一本の

蓬が風に飛ばされていくように万里の道を旅立って行く。空に浮かぶ雲は、さながら君の心のようにであり、沈みゆく夕日は、(君を送る)私の心を物語っているように思われる。

(いよいよ)手を振りきって君が立ち去ろうとすれば、君を乗せて別れ行く馬も(われわれの気持ちを知ってか)もの悲しく嘶いている。

【構成】

首聯に對句を用い、「青山」に對して「白水」と色彩的對照を、「北郭」と「東城」が方角の對照を示す。また頸聯「遊子」の心を「浮雲」に、自分の心を「落日」に準え(なぞ)る手法を用いている。なお頷聯は「一」と「萬」という對語を用いているが、句全体としては對にしておらず律詩として破格である。つまり、首聯が頷聯の對句構成を先取りした形で「偷春体」(梅花春色を偷んで先に開く意)と呼ばれるものである。

【観賞】

この詩は、いつどこで誰を送ったのか具体的なことは不明であり、作者の置かれた状況も分からない。もし特定の人物を送別した詩であれば、その人物名が詩題か詩句に表されるはずで、又それが当時の送別詩のあり方であった。

李白は交わった人の名を「贈汪倫」の例にみるように、詩文に記している細やかな感情の持主であったからである。ただ、この詩は友と別れる自分の心を比喩的に述べて惜別の余情の表現をしているところを理解していきたい。

青山北郭に横たわり 白水東城を遶る

ここに一つの町がある。青い山と白く光る川にとりかこまれた美しい町である。二人の人物が、この町で楽しい交遊の時を過ごしていた。

当時の都市構造では、町をとり囲んでいる城壁を更に外城壁がとり囲む形であった。その外城壁部分を「郭」といった。つまり「北郭」とは町の北の郊外で、「東城」も町の東の郊外のことである。

この首聯での対句は、「青山」「白水」によって美しい自然を、そして「北郭」「東城」によって町はずれの物寂しい光景を述べている。

此の地一たび別れを為し 孤蓬萬里に征く

楽しい交遊の日日を過去のものとして、君は今旅立とうとしている。この町を後にしてしまえば、孤蓬があてもなく風のままに転がって行くように、孤独で不安な旅が待つ

ているだろう。

「一為別」の語調には、過去と未来、明と暗、二人から一人と状況が暗転する時点に今いるのだという強い響きがある。

孤蓬は、たった一本の転がる蓬。この蓬は、わが国の「ヨモギ」ではなく、「ヒメジオン」と呼ばれる草で、一メートル以上にもなり、秋になると根元から風にふきちぎられて丸くなり地面を転がってゆく。北中国独特の草で、アメリカでも見られるという。「転蓬」「飛蓬」の語もある。ここでは、一人ぼっちで旅する友人を喩えており、目的を持たず流されていく放浪の旅を続けるイメージがある。

浮雲遊子の意 落日故人の情

領聯の「孤蓬」と、この頸聯の「浮雲」は共通するイメージでとらえており、風に流されていつて帰らぬものの表現であり、「遊子」は旅人である友人をさし、「故人」は古くからの友人や馴染みの友、つまり作者をさす。

今や別れようとする二人は万感の思いを胸に、空に流れる浮き雲と夕日を見ている。「浮雲」は旅人の象徴であり、「夕日」は宛らまだまだ留まって欲しいと思う作者の未練心でもある。その両者の思いは言葉によって言い尽くせない。

この二句は、「浮雲白日を蔽い遊子顧辺せず」『行き行き重ねて行き行く』という古詩「文選」をふまえているの

であろうが発想はこれと異なり、「雲」と「日」が対立するものでなく、重なり合うものに変えられている。

ただ、去る者と留まる者とお互いに相手を思いつつ、去る者には旅の孤独と不安が心に広がる我身への思いが強く、留まって見送る者の心には相手を思う気持ちが燃え広がっている。そうした心理を下敷にして考えてみると、白い浮雲には不安で空虚な心情の投影があるように感じとれる。しかしどのように別れが辛いものであっても、友は旅立って行かねばならない心をくみ取ることができる。

手を揮って茲より去れば
蕭蕭として斑馬鳴く

君は手を振りながら遠ざかって行くことすれば、君の乗る馬も(われわれの気持ちを知ってか)哀しげに嘶いている。

「蕭蕭」はもの悲しい様や音の形容で、語を重ねた畳語は擬態語や擬声語として用いられ、ここでは馬の鳴き声や馬の様子形容でもある。「斑馬」は仲間から離れ別れ行く馬。ここでは、見送りの馬か



友人を送る『唐詩選画本』による

ら去って行く馬で、友人と作者の間の感情の動きを馬の嘶きで結ぶこの詩の余情は深い。

なお、島崎藤村の「千曲川旅情のうた」にある「雲白く遊子悲しむ」は、この詩の「浮雲遊子意」からヒントを得たものであろうとされている。